

2019年 上田会長年頭挨拶 要旨

2019年1月7日

NHK広報局

あけましておめでとうございます。

この年末年始も、NHKは多彩で豊かなコンテンツをお届けするとともに、正確で迅速な情報をお伝えし、視聴者の皆さまの期待と信頼に応えることができたのではないかと考えています。

平成最後の紅白歌合戦は、総合テレビ、ラジオ第1放送に加えて、去年12月1日から本放送がスタートしたBS4K、BS8Kでも放送しました。初めて4K・8Kで放送された紅白として放送史に刻まれることになるでしょう。平成を歌で締めくくるにふさわしい素晴らしい紅白でした。

BS4Kといえば、きのう午前9時から大河ドラマ初のオール4K制作となる「いだてん」の初回を見ました。今後が楽しみです。

年明け早々には、皇位継承に伴う新しい元号が4月1日に公表される方針だというニュースを特報で伝えました。

3日には、熊本県で最大震度6弱の地震が発生しましたが、熊本放送局をはじめ関係部局がしっかり連携し、地域に寄り添った情報を適切に伝えることができたと思っています。

また今年も、Eテレの愛称で親しまれている教育テレビが、1月10日から放送から60年となります。教育分野の放送は、「教養」「報道」「娯楽」とともに、公共放送・公共メディアの役割の大きな柱です。今後も末永く、視聴者の皆さまに親しまれる存在であり続けたいと思います。

私は、まもなく会長に就任して3年目を迎えます。私は、3年間の任期をホップ・ステップ・ジャンプと位置付けました。1年目のホップの年は、課題抽出、すなわち経営計画の策定の年、ステップにあたる2年目は、抽出した課題の解決に向けた実行の年でした。3年目のジャンプにあたる今年も、実行してきたことを定着させる年にしたいと考えています。

私が毎年、年末年始になると思い出す、大好きな俳句をご紹介します。

こぞことし

「去年今年 貫く棒の如きもの」

これは高浜虚子が詠んだ有名な俳句です。改めて調べたところ、昭和25年12月20日にNHKのラジオの新春放送用の句として作られたものだ

ということがわかりました。

去年と今年を貫くものとして、一本の棒のようなものと虚子が表現しているところに、この句のスケールの大きさを感じます。句の解釈はいろいろできるのですが、今日は、私なりにこの句から感じ取っていることをお話しします。

この句は、私がよく口にする「変化のある中で、続けなくてはいけないこと。変えてはいけないことと、変えるべきことを取捨選択していく必要がある」という言葉に通じていると思います。今年も「去年今年 貫く棒の如きもの」の句のように、新しく変化しチャレンジする心と、反対に、通底している継続する力、やり通す力、この両方を持って仕事に臨むつもりです。

去年と今年で大きく変わるといえば、今年が日本が大きく変わる年です。4月30日に天皇陛下が退位され、5月1日に皇太子殿下が即位され、新しい元号がスタートします。平成が終わり、新しい時代が始まるわけです。

NHKが大きく変わる年でもあります。去年、総務省の「放送をめぐる諸課題に関する検討会」は、NHKが要望しているテレビ放送のインターネットへの常時同時配信について、「国民・視聴者の理解が得られることを前提に、一定の合理性、妥当性がある」とする報告書を示しました。また、自民党の「情報通信戦略調査会」の小委員会はNHKの常時同時配信を早期に実施できるように今年の通常国会に放送法改正案の提出を目指すとする提言をまとめ、総務省に作業を開始することを求めました。

しかし、常時同時配信の実現のためには、関係者や視聴者・国民の理解を得ながら準備を進めるとともに、NHKとして取り組まなくてはならない、いくつかの課題があります。

まず第一は、受信料の水準・体系についてです。ご承知の通り、去年11月の経営委員会で受信料の値下げを盛り込んだ、現経営計画の修正案が議決されました。

値下げを実施すると判断した理由です。公平負担の徹底に取り組んできたことに加え、一昨年12月の最高裁判決以降、自主的に受信契約を申し出る方が増えていることなどから、当初の計画を超える形で、受信契約や受信料の支払いが堅調に増えているという状況があります。

一方で、4K・8K本放送対応など大型の支出に対する備えに一定程度のめどが立ちました。

こうした現状を踏まえ、受信料で運営されているNHKとして、中長期的な事業計画や収支見通しを真剣に検討した上で、収支相償の考え方に基づき、

視聴者に受信料を還元する必要があると判断しました。

世帯数の減少などにより、今後、受信料収入は減少に転じると予測していますので、今回の値下げにより、値下げ前の収入規模を確保することは難しいと見ています。厳しい覚悟をもって、値下げを行うわけです。従って、NHKグループが一体となって不断の改革に取り組み、事業規模・事業支出を適正な水準に収めるよう努力しなくてはなりません。

第二に、他事業者との連携・協力などについても、取り組む必要があります。

テレビの同時配信に関しては、権利処理など、民間放送と共通の課題も少なくありません。これまで放送において培ってきた二元体制を維持しながら、放送と通信の融合時代においても、相互にメリットをもたらす連携ができるのであれば、さまざまな可能性について検討していきたいと考えています。

民放との関係は、私が会長に就任して以降、良い関係を築くべく、最も力を入れていることのひとつです。民放との協調領域として連携を深める取り組みの一つが2017年10月から実験として実施している「radiko」経由の配信です。新年度から本運用を開始する方向で検討しています。さらに、民放テレビ局が連携した公式テレビポータルサイト「TVer」についても、新年度から参加できるように具体的な調整に入っています。

第三は、「インターネット活用業務の会計上の透明性を確保」することです。

第四に、衛星放送の将来像の検討です。去年12月1日に4K・8Kの本放送が始まり、衛星放送は4波体制となりました。2020年の4K・8Kの本格普及に向けて、NHKはその先導役を果たしていきます。その上で、4Kの普及状況をみながら、衛星波を整理・削減する方向で、放送開始1年をメドに、その時点での考え方を示すことにしています。

最後に最も大きな課題は、コンプライアンスの徹底です。公共放送に携わるものが、不祥事を起こすことは言語道断です。不祥事の根絶を目指し、常に最大限の努力を行う必要があります。

「去年から今年へ」NHKが公共メディアへと大きく変わるために、視聴者・国民の信頼を裏切らず、期待や要望にしっかりと応えて、さまざまな課題に対し、真剣に取り組んでいきたいと思えます。

NHKが公共メディアへ進化するという事は、大きな荒波にこぎ出すようなものです。そのためには、しっかりとしたかじ取りが必要となります。どちらに進むべきか、行くべき将来を見据えて決めなければいけません。「Future Pull」の形で2020年以降のNHKはどうあるべきかを

検討し、NHKグループ全体の業務の見直しと「ヒト・モノ・カネ」の配分について中長期的課題の認識と共有をはかっていきます。

NHKにとって、常に「貫く棒の如きもの」でなくてはならないことがあります。

それは、「正確で迅速なニュースや質の高い多彩な番組をできるだけ多くの皆さんにお届けすること」です。特に、「国民の命と暮らしを守る」という公共放送、公共メディアの使命を達成することは、NHKにとって、常に「貫く棒の如きもの」です。昨今の自然災害は、甚大化、広域化、長期化が進んでいます。去年は西日本豪雨や相次ぐ台風の上陸、北海道地震など自然災害が相次ぎました。

こうした災害で得た教訓・知見を生かして、それぞれの地域に寄り添い、「安全・安心の拠点」としての役割をしっかりと果たしてもらいたいと思います。

また、今年、統一地方選挙、天皇陛下の退位・即位、大阪で開催されるG20サミット首脳会議、参議院選挙、ラグビーワールドカップなど、総力をあげて取り組まなければならない大型のイベントが続きます。

さらに、来年の東京オリンピック・パラリンピックに向けた動きや準備もあります。11月には、私が去年NHK会長としては10年ぶりに会長に就任したABU・アジア太平洋放送連合の総会が東京で開催されます。テーマは「多様で豊かな視聴体験を提供し、信頼を築く」です。総会の機会も積極的に活用し、NHKの国際的プレゼンスを高めていきたいと考えています。

また、これからの時代、視聴者とのつながりがますます不可欠なものになります。放送だけでなく、インターネットやイベントなど様々なタッチポイントで視聴者と結びつく視聴者コミュニケーションの役割の重要性が増します。公共メディアの役割を理解してもらい、「視聴者の皆さまから、より必要とされるNHK」になりたいと思います。

「平成」という時代が終わり、新しい時代がスタートするこの1年は、NHKが公共メディアへ大きく変わるための重要な年です。NHKにとっての「貫く棒」とは何かを常に忘れずに、皆さんと共に、「“公共メディア”のある暮らし」に向けて、まい進したいと思います。今年もどうぞよろしく願います。